

孔雀まで吹かれて來たり春の暮

藤田湘子

いかにも湘子好みの題材である。

孔雀は檻の中に飼われているのを見る位しか出会う機会がないが、羽を広げた美しさには憧れる。何度か動物園に通つたが、そのタイミングが合うことは滅多にない。「孔雀まで吹かれて來たり」には大いに共感する。

春の風は気まぐれ。気持のいい春風もあるが、春一番に始まる春の嵐のような荒れた日もある。その風に吹かれて、押し出されたように行き着いた先に孔雀がいた。

孔雀に会いに来たというよりは、風に吹かれて気がつけば孔雀の前にいた、というような感じ。

「孔雀よりはじまる春の愁かな」という代表句と共に駄蕩とした情景の中に感傷的な気分も揺曳している。

1974年 (546作) 第四句集『狩人』 鑑賞・野本京